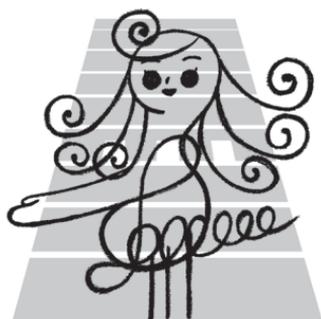


## 風薫るネグリジェ

托鉢がいちばん気持ちいいのは、やはり五月だろう。緑は美しいし、それを渡ってくる緩やかな風が微かに網代笠あじろがさごしに首筋を通り過ぎていく。薫風南くんぷうより来たる好時節である。

その日も、そんな気持ちのいい朝だった。我々雲水は、三人で「ほくほく」言いながら路地を歩いていた。ちなみにこの「ほく」という声だが、仏法の「法」だという説のほかに、食器である「鉢盂はつぼう」だという説もある。いずれにしてもその声は、托鉢に来たことを一般の家の皆さんにお知らせする合図であると共に、我々どうしが、お互いどこにいるのかを知らせる役目もある。

「ほく」と長く声を響かせ、気配を感じてふと目の前の建物を見上げると、なにやら遙かに上のほうで手を振る女性が見えた。その右手はコインを持っているらしく開かれていない。私は迷わず駆けだした。それはすぐに反応しないと、コインを投げる怖れも感じたからかもしれない。



い。以前にも肉屋さんの店先でコインを投げられ、それを拾おうとすると先輩に止められた。「投げつけられたお金を拾っても托鉢にはならない。我々は乞食ではない」と言われたのを憶いだしたのである。

女性が手を振っているのはマンシヨンの四階。投げつける気はなくとも、こちらがほやほやしていたらじれつたくなつて放る怖れもある。とにかく私は、ただひたすら四階までの階段を上つていったのである。

息を切らして四階に辿り着くと、女性はベランダから玄関のほうへ廻つてくれている。ドアを開け、そこに立つて待つていてくれたのである。私は息を切らしながらも型どおり頭陀袋ずだぶくろの端つまを掴んで開き、頭をさげて托鉢金を受け取ろうとした。

サンダルを履いたその女性の足許からふと上のほうに目が行き、よく見ると淡いピンクのネグリジェの奥に、下着が透けて見えている。それだけでなくも荒かつ

た私の息が、更に荒くなつたのは間違いない。しかも四十前後くらいに見える彼女は大きくドアを開けて玄関の内部を手で示し、「どうぞ」と言つたのである。

おそらく托鉢というものをよくご存じなのだろう。彼女は更に「仏壇の前でお経あげてくださるんでしょ」と無邪気に付け加えた。

香水を含んだ薫風がネグリジェを揺らして吹き抜けていった。遠ざかる仲間の「ほく」が出発まえの連絡船の汽笛のように聞こえてきた。

私は一瞬迷つたあと、きつぱり言つた。「あのう、托鉢は玄関口で頂くものなんです。すみません。仏壇でのお経も、よめません」

納得してくれた彼女からお金を頂くと、私はさつきより息を切らして階段を駆け下り、連絡船に飛び乗るように仲間と合流した。え？ いったい何が書きたかつたのかつて？ そりゃあやつぱり、五月の托鉢は気持ちいい、いや、いろんなことがあるもんだつてことです。